

一般調査報告書

2026年上海交通大学日本語スピーチコンテスト決勝 審査参加報告

1 はじめに

2026年4月8日、上海交通大学において、「2026年上海交通大学日本語スピーチコンテスト」決勝が開催され、審査員として参加しました。同日は上海交通大学の建校130周年の節目にも当たっており、本行事は大学の周年文脈の中で行われた教育・国際交流行事の一つとしても位置づけられます。

今大会のスピーチテーマは「旅行のあり方」でした（図1参考）。学生たちは、自らの旅行経験、留学経験などを素材として、旅行を単なる移動や観光ではなく、異文化理解や自己認識の更新につながる営みとして捉え直し、日本語で論理的かつ感情豊かに発表していました。審査員として参加した立場から見ても、全体として非常に水準が高く、日本語能力だけでなく、論理構成力、表現力、質疑応答力のいずれも優れていると感じました。

本報告では、まず大会の概要を整理したうえで、主催した上海交通大学外国語学院日本語学科の位置づけ、そして共催した名古屋大学と上海交通大学との関係、中国における日本語学習者の状況を確認し、最後に審査参加を通じて得た所感をまとめます。



図1：コンテスト案内（出典：上海交通大学外国語学院日本語学科）



写真1：会場の様子（2026年4月／筆者撮影）

2 大会の概要

本大会の中国語の正式名称は「2026年上海交通大学日语演讲比赛」です。募集対象は上海交通大学の学部在学学生（本科生）であり、予選は2026年4月1日、決勝は同年4月8日に上海交通大学外国語学院で実施され、予選を勝ち抜いた12名が発表しました。当日は、開幕式、スピーチ本編、学生パフォーマンス、審査員講評、表彰、閉幕式までが半日でコンパクトに構成されており、

日本語運用能力の発表の場であると同時に、日本語学科学生による文化的表現の場としても設計されていました。

また、予選結果に関する公式発信からは、本大会が全学的な広がりを持っていたこともうかがえます。告知では、参加者は外国語学院日本語学科1年生から3年生の学生に加え、同大の浦江国際学院、化学化工学院、機械与動力工程学院など複数学院の学生も参加したと説明されています。つまり、本大会は日本語学科単独の内輪の催しではなく、学内の広い参加を得たイベントであり、日本語学習の成果を学内全体に向けて示す場として機能していたと考えられます。

本審査において、スピーチ部門では、内容の深み・独自性、構成・論理性、発音・イントネーション、文法・語彙の正確性、表現力が評価項目とされ、質疑応答部門では、質問の本質理解、回答の論理性・具体性、言語運用能力、即応力・流暢さが評価されていました。さらに、スピーチ時間や回答時間にも基準が設定されており、時間管理も採点の前提条件として重視されていました。こうした審査設計からは、単に「正しい日本語を話せるか」ではなく、「限られた時間で、考えを整理し、相手に伝わる形で表現できるか」が重視されていたことが読み取れます。



写真2：会場の様子（2026年4月／上海交通大学日本語学科撮影）



写真3：会場の様子（2026年4月／参加者撮影）

3 上海交通大学と外国語学院日本語学科

上海交通大学は、1896年に設立された「南洋公学」を前身とする中国有数の名門総合大学です。南洋公学は、清朝末期に創設された近代的な高等教育機関で、外国語や実務に関わる教育を重視した学校として知られており、現在の上海交通大学の歴史的源流となっています。

外国語学院については、学院公式サイトにおいて、その源流が大学創設期の外語教育にまで遡ることが説明されています。学院の沿革によれば、1928年の外国文学系、1943年の英文科、1952年の俄語教研組、1957年の外語教研組、1979年の科技外語系を経て、1997年に上海交通大学外国語学院が成立しました。なお、俄語教研組はロシア語教育・研究を担う組織、科技外語系は科学技術分野を支える外国語教育組織を意味します。すなわち、現在の学院組織は比較的新しい名称であっても、その教育基盤は長い蓄積の上に築かれていることが分かります。

日本語学科についても、学院公式サイトは、上海交通大学の理工・管理・法学等を含む総合大学としての基盤を生かしつつ、日英双語を重視し、人文社会科学と自然科学の両方にまたがる「複合型人才」の育成を掲げています。この教育理念は、今回のコンテストで重視された「内容の深み」「構成・論理性」「表現力」「即応性」とよく一致しています。実際、当日の学生発表を見ても、単

6 審査参加を通じて感じたこと

審査員として特に印象に残ったのは、学生が日本語を単なる「学習対象」ではなく、自身の経験や考えを他者に伝えるための言語として、高い水準で運用していた点です。とりわけ優勝者は、質疑応答での「印象に残っている日本の小説」に関する質問に対し『金閣寺』を挙げ、交換留学中の拝観経験を具体的に紹介しながら、読書経験と実地経験を往復させて「旅行のあり方」というテーマに無理なく結び付けて説明していました。このように、質問意図を的確に捉え、具体例を用いて論理的に応答した点は、質疑応答の評価観点である「質問の本質理解」「回答の論理性・具体性」に照らしても示唆に富む内容でした。

他の学生の発表も総じて水準が高く、中国国内、欧州、日本各地での滞在経験などを題材にしながら、単なる旅行記ではなく、その過程で感じた驚き、違和感、再発見を丁寧に言語化していました。審査の観点から見ると、感情表現が主観的な独白にとどまらず、具体描写を通じて聴衆に共有可能なものへと転換されているか、また結論が「旅行のあり方」というテーマにしっかり回収されているかが、発表の質を左右していたように思います。

また、当日は学生パフォーマンスとして1年生による合唱『正解-RADWIMPS』や2年生による舞台劇『走れメロス』も組み込まれていました。同日の午後には日語学科校友交流会も一体的に実施されており、スピーチコンテストだけでなく、歌や演劇、卒業生との交流を通じて、日本語学習が総合的な表現活動として展開されていることがうかがえました。競技としてのスピーチと、作品としての上演とを同日に配置する構成は、言語を論理的に使う力と、情感を伴って表現する力の双方を育てる教育設計として、大変示唆に富むものでした。



写真4：会場の様子（2026年4月／筆者撮影）



写真5：会場の様子（2026年4月／筆者撮影）

7 終わりに

今回の上海交通大学日本語スピーチコンテスト決勝への審査参加は、中国の大学生による日本語学習を具体的に確認できる、大変有意義な機会でした。しかもそれが、上海交通大学建校130周年の節目の日に行われたことで、大学の伝統、語学教育、国際交流が重なり合って現れる場となっていた点に、大きな意味を感じました。上海交通大学は長い歴史を有する中国有数の総合大学であり、外国語学院も創設期に遡る外語教育の伝統を引き継いでいます。その中で日語学科が継続的にスピーチコンテストを開催し、学生の日本語による発信力を鍛えていることは、教育理念の具体的な実践として示唆に富むものです。

また、上海交通大学は、名古屋大学とは2001年からの大学間交流協定を基礎に継続的な交流が続いており、愛知県とも2019年以降の覚書に基づく協力関係が継続しています。こうした関係性を踏まえると、今回の大会は、単なる語学コンテストではなく、大学間交流、地域間交流、人材交流が重なり合う現場でもありました。中国における日本語学習者数が世界最大であることも考え合わせれば、このような教育・人的交流の現場に直接触れることは、今後の日中交流を考える上で大きな意義があります。学生たちが日本語を通じて異なる文化を理解しようとする姿勢、また自らの経験や思考を日本語で伝えようとする真摯な態度は、将来の研究交流、ビジネス交流、地域交流の基盤となり得るものです。

愛知県上海産業情報センターとしても、こうした取組について、今後も継続的な情報発信に努めてまいります。

【参考文献】

上海交通大学

<<https://sfl.sjtu.edu.cn/>> (2026年4月10日閲覧)

名古屋大学

<<https://www.nagoya-u.ac.jp/>> (2026年4月10日閲覧)

名古屋大学中国交流センター

<<https://www.nushanghai.net/>> (2026年4月10日閲覧)

国際交流基金『2024年度 海外日本語教育機関調査』

<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/information.html>> (2026年4月10日閲覧)

本資料は、上海産業情報センターが、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。

上海産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力していますが、その正確性を保証するものではありません。本情報の採否は読者の判断で行ってください。

また、万一不利益を被る事態が生じても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。